豆腐小僧、あらわる―化け地蔵・豆腐地蔵の応化―

徳田和夫

はじめに

物語にあふれるこの国は、その書物も汗牛充棟である。本稿は、それも江戸時代後期（18－19世紀）の小形の絵本に絞って、ひとつの特別な事象の出来を解析していく。謂うに、草双紙。表紙の色によって順に赤本、黒本、青本、黄表紙と呼ぶ。全丁に絵を配し、合間に本文やセリフを細かに記している。虚実とりまぜて伝奇や、世事の奇談をものがたり、また昔話・伝説にも材を取って、滑稽と風刺が受けた。古くからのビジュアル・カルチャーは、ここに新しきを継いだ。

なかでも、安永ごろ（1772-81）から文化初年ごろ（1804-18）の黄表紙は、とりわけ「化物」（お化け）をよく題材とした。いわゆる妖怪の目白押しである。プレモダンでは、人は見えない闇の存在を想像し、名づけ、象り、話を創ってきたが、この時代には新たに興じるようになった。

いったいに妖怪観想は人間ならではの所為である。通時的な精神文化なのであった。現代はアニメなどのメディアが、また美術・博物館がとりどりに演出して仮想現実化している。江戸の後期は、浄瑠璃や歌舞伎が立体的な仕掛けをほどこした。絵草子も化け物を並べ立てた。これを近世文学研究家アダム・カバット Adam Kabat氏が広く探りだし(1)、妖怪文化史や比較妖怪学の沃野足らしめた。

Ⅰ 大頭の小僧

黄表紙をひもとくと、子ども姿のお化けに目がとまる。そちこちに登場して、なぜか豆腐をお盆や折敷に載せて運んでいる。たとえば『天怪着到牒』（天明八年〈1788〉刊、鶴屋板。北尾政美画）(2)は、お化けの勢ぞろいを、中世の豪傑朝比奈三郎義秀が打ち破るとの話である。絵師の北尾政美は、むしろ鍬形恵斎の名で知られている。幕開けはこうである（以下、原文の引用に当たって、踊り字の「くの字点」は開いた）。

世にいふ妖怪は、臆病より起こる。我が心を向ふへ現してみるといへども、其の理ばかりにあらず。夜深に入れば、いろいろ怖ろしき姿を現し、見る人、肝を消す。

妖怪とは臆病心に生じるというが、自分に照らしてみると、そうとは限らない。夜更けにはさまざまな怖い姿をあらわすので、人はそれを見ると怖くてしょうがない、と。続いて、化け物の親分見越し入道が配下のモノを呼び集める場面となる（図①）。雲を突くような入道が杖を突いて立ち、首をぐぐっと伸ばして、見下ろしている。次のような書き付けがある。

化け物の親玉見越し入道現われ、手下の化けどもを呼び出だす。

図①（注１『妖怪絵巻 日本の異界をのぞく』より）

入道の首は左下に降りている。そこには、雨天に用いる筍笠をかぶる子どもがいる。大顔である。赤子や嬰児ならば、頭部は体躯に比して大きい。しかし、これは小児である。誇張であれば、そうするわけがあるのだろう。それが、豆腐を捧げて現われた。足先は、入道もそうだが、獣のように二股になっている。小僧には次のような説明がある。

入道の孫、大頭小僧。雨のそぼふる夜、豆腐屋を驚かし、一丁締めて来る。

見越し入道には孫がいた。血筋なのか、大頭小僧である。雨がしとしと降る夜に、豆腐屋を威して、豆腐一丁を取ってきた。その眉は八の字のいわゆる地蔵眉で、顔つきはあどけない。歌舞伎などにおける童顔の描法であり(3)、可愛いが、やや気味が悪い。この、お化け世界の御曹司らしきはいったい何者なのであろうか。なお、豆腐には紅葉印が押され、いわゆる紅葉豆腐である(4)。

その着物は模様があざやかで、肩ほどにでんでん太鼓がみえる。子ども向けの柄である。裾には鯉らしきが描かれている。勢いよく育つのを願っての図であろう。そして、袖には達磨の起き上がり小法師が、左裾にはミミズクを染め付けている。どちらも当時の厄除けの疱瘡絵によくみる図柄で、もって小僧は疱瘡神として造形されたようである(5)。大顔にして、豆腐を奉っているのにかかわる様態といえよう。

ただし、当該の図柄は『天怪着到牒』だけにみる。この小僧は人気者で、『化物箱根先』（鳥居清長画、安永七年〈1778〉刊）、『小霖雨見越松毬』（曲亭馬琴作、北尾重政画、寛政八年〈1796〉刊）、『怜悧怪異話』（十返舎一九画・作、文化三〈1806〉年刊）、『化物世帯気質』（晋米斎玉粒作・

歌川美丸画、文政3年〈1821〉刊)(6)などに登場する。その図柄は格子縞のほかは、目だつのは波の寄せ返し(『化物仕内評判記』恋川春町作・画、安永六年〈1777〉刊)、小舟散し(『小霙雨見越松毬』)ぐらいである。小僧の疱瘡神たる任務は一回限りで終わったようだ。

Ⅱ 豆腐は役だつ

小僧の姿態は、背丈は小ぶりで、頭でっかちである。あれこれの黄表紙では普段でも筍笠をかぶっている。そして、豆腐に御執着なのであった。なぜそうなのか。理由あっての造形に違いない。本稿が目ざすのは、それを突きとめることにある。

豆腐が必須のアイテムとなっているのは、江戸中期には衆庶の食生活に豆腐がいきわたり、とくに豆腐料理の本が出版され、関心を呼んだことに関係するとされてきた(7)。そうであるならば、なおさら留意すべきは、豆腐は慈養に富むゆえ、呪的な力を有するとの心意がはたらいていたことである。

京都の年中行事を記した貞享二年(1685)序『日次記事』に、節分の夜、歳男が大豆と銭を紙に包み、それで身体をさすって、厄払いに渡したとある。豆腐の素の大豆は、穢れを落とすとされていた。節分の鬼を払う豆まきに類する習俗である。大豆にかかわる俗信は他にも多い。(8)。

江戸の事例に、根岸鎮衛『耳嚢』(文化六年〈1809〉奥書)の「いぼの呪いの事」がある(巻八)(9)。

> いぼの呪ひ、品じなあるなれど、三日月へ豆腐壱丁を備え念頃に祈る時は、其治る事妙也。右豆腐は川へ流し捨る事也。あやまつてその豆腐喰ふものは、いぼ、其喰ふ者へ生る事また奇妙のよし、人の語りぬ。

疣は三日月に豆腐を供えることで取り除けるとされてきた。なお、供えた豆腐は川へ流す。これは、穢れを人形に付けて水に流す。また達磨を新しく買うときに、前年の達磨を「達磨流し」といって川に流すのと同じ儀礼である。なおも、愛知県豊川市や大阪府八尾市辺りでは、三日月の日(旧暦三日)には必ず豆腐を買い、井戸蓋の上へ置いて三日月様に供えてから食べた、すると娘の縁づきがよくなったという(10)。『狂歌百物語』(嘉永六年〈1853〉刊)の「豆腐小僧」にみる狂歌「影暗く差す三日月の入る方に捧ぐ豆腐か小僧もてゆく　長門由縁」(後述、注20)は、その「豆腐と三日月」の民俗を踏まえている。

また、昔話研究者の野村純一氏が編んだ『上蛇窪ムラばなし百話―米谷トモヱ・聞き書き―』の一話の語りに、注目すべき一節がある(11)。

> 結核はみんな嫌ったからね。それで死んだら、お豆腐一丁持っていくんだよ。(略)枕元に置いて(略)菌がね、お豆腐にみんな吸い込んでくれるって。

豆腐が悪病を吸い込むとは、豆腐には微小な穴がたくさんあって、水をたっぷり吸い込み、また沁み出すことに関わる発想であろう。凍み豆腐(高野豆腐)は浸せば重くなり、絞ればもとのように軽くなる。通じる民俗に、豆腐が嘘の罰を帳消しにしてくれるという民間伝承もある。戸倉波伝谷(宮城県本吉郡南三陸町)の春祈祷である。(12)。

> 契約講によって取り行われる行事です。早朝、神社に集まって朝日を遥拝した後、東の村境へ移動し、東から西へと獅子舞が地

区内の全戸を廻って家々の悪気を取り込みます。家主は必ず豆腐を用意しておき、これを依り代として悪気を封じ込め、日の暮れる頃に西の村境でまとめて祓い捨てます。このとき獅子は大きく口を開いて悪気を吐き出し、以後、翌年の春祈祷まで絶対に口を開かないことになっています。」（VIRTUAL MUSEUM）

さらに、鳥取市とその周辺では「八日炊き」が伝わり、「師走に豆腐を食べると一年間のうそが帳消しになる」と伝承されてきた(13)。これは「こと八日」と呼ぶ広くおこなわれてきた民俗で、十二月八日、二月八日に悪い霊（モノ）を異界に送り返す行事である。

豆腐を食べて1年のうそを帳消しに―。鳥取市河原歴史民俗資料館（同市河原町）で8日、恒例の「うそつき豆腐」があった。地元の住民グループ「民俗行事を語る会」が30年以上続ける地元の風習の「実演」で、会員らがいろりで焼いた田楽や鍋でゆでた豆腐にゆずみそをつけて食べた。谷幸彦会長（80）によると、商家の風習で旧暦の12月8日にしていたと伝わっているが、由来はわかっていない。売り上げを伸ばそうとした豆腐屋の智恵という説もあるという。この日はすす払いもあり、長さ約3メートルのほうきを持って手伝った市内の森の幼稚園「空山ぼくじょうようちえん ぱっか」の園児10人も参加した。年長組の大久保杏ちゃん（5）は「お母さんに宿題すると言ったけどしなかった」とうそをついたことを告白。豆腐を食べて消えたかな？　まだ覚えてるから消えていないけど、おいしかった」とはにかんだ。

（古源盛一）

そして、豆腐は子どもの夜泣きを直すとされてきた。山形県鶴岡市の禅龍寺（曹洞宗）および福島県会津若松市の四之町の地蔵菩薩は子育ての霊験があるとされ、「豆腐地蔵」の名で知られている(14)。

本堂内にあるとうふ地蔵は乳児の夜泣きを救うと信仰され、豆腐を納めて祈願する風習がある。（禅龍寺）

馬場上四之町の北側に馬場町寄りに地蔵堂があった。「新編会津風土記」によれば、中御堂屋敷と称し、昔は城の北西にあったが、文禄元年（1592）当町に移した。現在は高厳寺（浄土宗）門前東側に祀られて、豆腐地蔵とよばれ、豆腐を供えてお参りすると、子供の夜泣きが直るという。（四之町）

「豆腐地蔵」とは端的な呼称である。加えると、山形県飽海郡松山町の善応寺の地蔵もそう通称されていて、「門内にあって、村人たちは豆腐を作るとまずこの地蔵に備える」（『郷土研究』2、『新編日本地蔵辞典』）。地蔵尊の通称（霊名）は、地蔵菩薩の利益（りやく）説話やその祭祀儀礼から付けられ、定着した。本稿にとって重要な事柄であり、第4、5章で詳述する。

ついては、土浦市横町浄真寺の地蔵は、子どもの夜泣き封じに霊威があるとされた。豆腐には触れてはいないが、「化け地蔵」（後述）と呼ばれている(15)。

幼児が夜泣きするのは、腹の中に虫がいるからだと信じられてきた。この地蔵に虫封じの願をかけると、地蔵は夜なかに出歩き、泣いている幼児のところへ行って夜泣きをなおしてやるという。そのため、化け地蔵といわれていた。

黄表紙には、こうした霊妙なる豆腐を捧げた大頭の子どもがあちこちに登場している。なかには、腰にちろり（燗をつける道具）を下げて、「おぢさん、これ酒、豆腐買ふてきた。奴で一つあがれ」といって、往来人を震え上がらせるのであった（『ばけもの』西村重信画、刊年未詳）(16)。

Ⅲ 呼んで豆腐小僧

改めて、大頭小僧とは形容なのか、それとも別な呼び名があるのだろうか。ついて、読み本作家の滝沢（曲亭）馬琴が、寛政十二年〈1800〉にものした浄瑠璃用の読本『狸和尚勧化帳／化地蔵畧縁起 化競丑満鐘』は妖怪文化史に必須の書である（後述）。その一節を引く(17)。（傍線は徳田、以下同じ）

狸が一子川太郎、まだ九つ藪育ち、竹の子笠を打冠り、盆に豆腐の小半丁、ちよこちよこ走る頭勝。かの赤本に畫いたるとうふ小僧と見えにける。

この一節は、馬琴が以前にそうした小僧を赤本に書いたのか、あるいはかつて読んだ赤本にかかる姿をみたのかはっきりしないが、「とうふ小僧」=「豆腐小僧」の名が18世紀末期には定着していたことを示す。その頃には、狸の一人息子の川太郎（=河童）の化けたものともされ、年は九歳であった。

「豆腐小僧」とは為たり。この珍妙な名の化け物は、近世中頃までの説話には聞かず、妖怪画にもみない。言い換えれば、伝統的な古典妖怪や伝承妖怪（民俗妖怪）ではない。唐突に現れて紙面を賑やかした新参者である。それでもカッパ説が付くほど、人気を呼んだのである。その出現の事由を発言されたのは、著作順に挙げると、水木しげる、京極夏彦、多田克己、香川雅信の各氏である。

水木氏は「どのような妖怪かは不明だが、一つ目小僧や河童も、手に豆腐を持つ姿で描かれることがあるので、何かしら関係があると思われる」とする(18)。『妖怪の理 妖怪の檻』（2011年、角川文庫）を著した京極氏は、それがいきなりの登場ゆえ、人間社会と然るべく縁故があると、妖怪研究に注意を促した(19)。多田氏は「『妖怪画本 狂歌百物語』妖怪総覧」において、妖怪小僧の初出は明和九年（1772）頃とし、「豆腐小僧は怖くない妖怪という意味で、豆腐は強くない食べ物であ」り、豆腐小僧はこわくない食べ物の小僧という意味で、怖ろしくないと洒落たと思う」とする(20)。近世の妖怪説話やその画像に詳しい香川氏は水木氏の説と同旨を述べている(21)。

なお、馬琴や水木氏がいうカッパの伝承において、安藤（歌川）広

図②（注20『妖怪画本 狂歌百物語』より）

重（1797-1858）の掛幅絵『河童図』（東京都台東区曹源寺蔵）は見逃せない。河童が豆腐を捧げている(22)。先に触れた『化物世帯気質』では、小僧は尻から太い尾が出していて、獺が化けたとの設定である。しかし狸や河童説は、豆腐小僧が知られ、人気を取ってからの付会とみられ、『河童図』は後出の作品であろう。狸が人間の子どもに化けると観想しえても、豆腐をもつと着想するにはよほどのきっかけが必要である。かの『豆腐百珍』（注7参照）を持ちだすのはまだしも、豆腐屋の宣伝策略説は証拠の立てようがない。

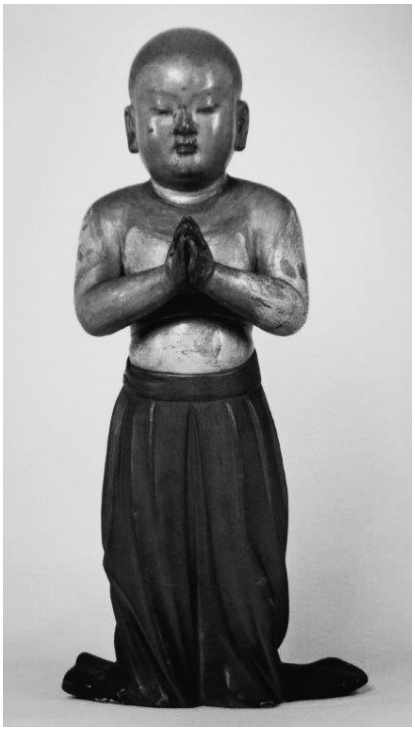
では、当代の人びとはどのように見ていたのだろうか。事の芽ばえ、流行りに接して、案外にそのより来たりを察していたのではないか。「豆腐小僧といふ化物は、頭大ぶりにて、四五歳に見へ、眼ばちばちと光らかし、夜、人の後について送る」、また「もしもし、おぢさん、わたしもいつしよにまいりましよう」などとしている（『妖怪仕内評判記』、注1『大江戸化物細見』）。

時代人は世の中に暮らし、新しきものの動きを見聞きしていたはずである。村上健司氏は「『狂歌百物語』には盆に豆腐を載せた小僧の姿が描かれている」と記す(23)。この書は先に触れたが、京極夏彦・文、多田克己・編によって刊行されている(24)。その第四編の豆腐小僧の絵は、雨のなか筍笠をかぶり、右手で紅葉豆腐を置いた丸盆をもち、下駄ばきで歩くさまである。［図②］なお、着衣は紺の無地である（同書 p.123）。狂歌が十七首あり、その内、豆腐小僧観がよくうかがえる四首を引く。

捕へんとすれども脇へ退き豆腐　小僧も得たる早業ぞある　　鶴子

やはらかき豆腐小僧は中々に　人も噛むべき勢ひやある

讃岐黒淵　玉露園秋光



図③（太子二歳像、京都市白毫寺蔵）

影暗く差す三日月の入る方に　捧ぐ豆腐か小僧もてゆく

長門由縁

やはらかな豆腐小僧に出会うたと　聞いて怖き（強き）といふ人もあり

二本坊鼻高

「やはらかき」「やはらかな」は豆腐をいうが、小僧の大きな顔やからだのことも掛けている。ふっくらとして福々しい。なお、大顔の化け物は十四－五世紀の『土蜘蛛草紙絵巻』に、眉太の尼君姿で出現している(25)。この系譜は近世の妖怪絵巻にみられる。

こと豆腐小僧に関しては、類似の造作を江戸後期から近・現代までの人形やキャラクターに照らしておきたい。伝統的なものにまずは福助人形(26)が、また鳴子温泉などのこけし人形や西南日本の田の神像がある。田の神は笠をかぶるものが多い。これらを継ぐのが五月人形の金太郎・桃太郎人形である。そして近代ではキューピー人形や、現代では不二家のポコちゃんとペコちゃん、サンリオのキティが知られ

図④（安永六年〈1777〉銘石地像、杉並区蓮華寺）

図⑤（銅造地蔵菩薩像、正徳二年〈1712〉造立、新宿区太宗寺）

ている。また、ゆるキャラでは「せんとくん」や「ひこにゃん」がいて、ついには「チコちゃん」に至っている。伝承妖怪のコナキジジ（子泣き爺）も、キャラクター化されると、頭でっかちであり、どれも可愛さの演出である。

これをより古きに求めると、人身としては、聖徳太子の二歳像が相当する。太子信仰の盛行にともなって、鎌倉時代初期には柔らかなからだつきで、ふっくら顔となっている。さすが聡明にして、目つきは鋭い(27)［図③］。太子の偉業のひとつは仏教将来である。仏身としては、人間の姿を模した地蔵尊の頭が大きい。蓮華寺（杉並区）の石地蔵（安永六年〈1777〉銘）［図④］、太宗寺（新宿区）の江戸六地蔵の一体（正徳二年〈1712〉造立）［図⑤］、千体地蔵（水子供養地蔵）などはふくよかな顔つきで慈悲ぶかさを体している。この地蔵と笠は切り離せない。文化人類学者の山口昌男氏は、豆腐小僧の「頭に笠を戴いているのは神化現を思わせる図像の工夫であろう」とされる(28)。

豆腐小僧は化け物すなわち変化である。この様相を仏教では応化ともいう。豆腐小僧の出来を神仏信仰とくに地蔵信仰史から解きほぐして然るべきである。予め触れると、江戸後期には「化地蔵」と呼ぶ説話も多い。

Ⅳ 地蔵菩薩の信仰と説話

さて、仏教でいうところの菩薩とは、悟り求めて修行し、衆生（一切の生き物）に利益を与える救済者をいう。地蔵菩薩は、釈迦如来（仏陀）の入滅後、56億7千万年を経て弥勒菩薩が出現するまで、六道を輪廻転生する衆生を済度する（地蔵本願経、延命地蔵経など）。十世紀末の『往生要集』に「地蔵菩薩は毎日晨朝に恒沙の定に入り、法界に周遍して、苦の衆生を抜く。所有の悲願、余の大士に超へたり。かの経（地

蔵十輪経）の偈に云く、一日、地蔵の功徳大名聞を称せんに、倶胝劫の中に余の智者を称する徳に勝る。たとひ百劫の中に、その功徳を讃説すとも、なお尽すことあたはず。故に供養すべし」とある（「欣求浄土」日本思想大系）。

地蔵信仰は平安時代から盛んとなった。地蔵は人間を地獄界から救い、現世利益を授け、生活上の苦しみを代わって受けるとされた。地蔵説話には、とくに堕地獄救済説話（抜苦譚）や身代わり説話（代受苦譚）が多い。その語り始めは信者の労苦の場面であり、そこに地蔵が生身（肉身）で現われる。ほとんど「端厳」「端正」「美麗」な子どもや小僧に化身（応化、変化）して奇跡をおこなう。最後に、その証しとして、尊容に特異な痕跡を示して語り収める。

こうした形式の物語は十四巻本『地蔵菩薩霊験記』（続群書類従本。24話）や『今昔物語集』（巻一七。32話中10話）に、また元禄十年（1697）刊『延命地蔵菩薩直談抄』にあふれている。たとえば「化馬地蔵」は、地蔵が白馬に応化して無信心の老女を得脱させる（29）（巻九－41。旧浅草閻魔堂。杉並区華徳院）。さらに、天正十三年（1585）書写の『直談因縁集』巻五「婆羅門、地蔵に結縁して后に転生し妙法の功徳を蒙る事」では、地蔵は力士、犬の子、白馬、鳥となって現れており、「地蔵の反化なれば、此のごとく神通を以て、色々に化現せり」とする。

地蔵尊への讃嘆は、その霊験をもって通称（霊名）としてきたことに映じている。はやくに柳田國男が「地蔵殿の苗字」と題して論じ（30）、たとえば延命地蔵、子育て地蔵、塩かけ地蔵、縛られ地蔵、田植地蔵、照手笠地蔵（31）、とげ抜き地蔵、化け地蔵（後述）、餅食い地蔵（『地蔵菩薩応験新記』上末・一）、山送りの地蔵（『宝物集』四）、笑い地蔵（32）などと多様化した。筆者在住の東京都杉並区では長延寺「ぼたもち地蔵」、東運寺（釜寺）「身代わり地蔵」が知られ、長龍寺「豆腐地蔵」は後に詳述する（33）。そして、近世後期に『地蔵大菩薩四十八体御詠歌』が刊行されている（日本歌謡集成4）。この「体」とは利益の様態をいう。

また、農民に代わって、小僧姿で田植えをする田植地蔵説話は、はやく中世の『地蔵菩薩霊験記』第10、『宝物集』三、『大山寺縁起』上、『直談因縁集』（六－24）にみえ、各地に田作・泥足・泥掛・水引・鼻取地蔵という名もおこなわれている。御府内で有名なのは浅草公園や、浅草橋場の法源寺のそれで、また端では高田馬場の玄国寺（土屋地蔵）が知られている。

そして、地蔵尊は子ども好きと観想され（34）、昔話において主役、脇役を張っている。「言いなり地蔵」「言うなの地蔵」「笠地蔵」「地蔵浄土（おむすびころりん）」「猿地蔵」が伝わる。さらに、苦難の継子の味方をする。ことわざでは「地蔵顔」「地蔵の顔も三度」「地蔵の頭に蠅」「地蔵と閻魔は一」などがあって、衆庶の信仰が篤くなされてきた（地蔵信仰史のおもな参考文献を末尾に記した）。

V 地蔵の応化―化け地蔵説話―

地蔵は人道（「じんどう」）に、さまざまな姿形で現れる。ここで引くその説話・伝承は、ことは江戸で著作刊行された黄表紙の生成環境たる御府内と近郊に取材する。さらに武蔵野全域および関東一円にも求め、他地域の伝承で注目すべきバージョンは取り上げる。

まずは柳田國男「黒地蔵白地蔵」、「伝説と児童」を掲出する。事例を多く挙げて長文でもあり、二字下げ引用とはしなかった。

馬琴が昔話（ママ）『質屋の庫』（昔語質屋の庫）の挿画に、化地蔵の旅人に斬らるる処があった。少年の頃この書を見て、およそ世の中にはこれほどあり得べからざる事はあり得ぬと感じたが、今とてもその感じは

同じである。（略）この話は諸方で聞く。

たとえば、『堺鑑』に、堺の北荘皇子が飢（ママ）の北の辺に、昔は辻堂あり、順礼などの休所なりしに、夜な夜な奇怪あり。ある夜、道行人行き合い、化生の者を切る。明けて見れば、すなわち石地蔵なり。ゆえに首切地蔵と名づく。諸願の祈りに験（げん）あらずということなし。其の時の太刀（たち）の痕（あと）現に拝まれたまうとある。

『伊豆誌』巻四にも、仁田村の束束（ママ）そという所の薬師堂の傍に、昔は石地蔵あり。夜更け、鬼女に化け通行人の髪を引く。狩野領の若侍に手を切り落され林中に遁げ入る。夜明けて見るに地蔵の手、田畔（くろ）にありしという。ゆえに、手無仏という。後に人、盗み去る、とある。（略）幸い地蔵所在地の近傍に通例存在する化物の話を取って附け、化けて通行人を脅かしたから斬れたのだと、近世普通の社会法則の説明を試みたのである。（略）

相州鎌倉二階堂覚園寺の黒地蔵、地獄を巡りて罪人の苦しむさまを見、自ら火中に投じ救われしより、火にくすぼりて色黒し。幾度彩色を改むるも、一夜の中に色黒く元の如し。また火焼（ひたき）地蔵ともいう（東海道名所図会）。（略）『浪華百事談』七によれば、野中観音堂の門前にあった石地蔵は、墨汁を注ぎかけられ常に真黒なり。願成就の時には必ず墨汁を持ち来たり洒（そそ）ぐ。ゆえに墨掛地蔵と申す由。（略）駿州鈴川の附近にも、小僧に化けたという石地蔵、これまた白粉（おしろい）にて化粧せられ（田子の古道）、大阪天王寺の地蔵も十一月十六日の朝、面に米の粉を塗られ、その夕方にはまた藁火（わらび）を焼きて顔をいぶし、明年の明年のと囃（はや）し踊りし由（『浪華百事談』九）(35)。

以下、柳田は地蔵が人々救うとき、姿を変えて現われる例を、「見なれぬ小僧さん」「別の子ども」「十七八之青年」「七十ばかりの老僧」「若い法師」と挙げ、「地蔵菩薩霊験記」という足利時代の書物に物語（略）、出雲の大社の農夫が信神していた地蔵様は、十七八の青年に化けて（略）」(36)などと記している。

このように民俗における地蔵信仰は人心をうかがうに重要であり、地蔵説話は広く伝承されてきて、文芸文化に大きな影響を及ぼしていた。以て、本章では各地の、また文献における化け地蔵説話を取りあげていく。

《口頭伝承編》

① 東京都青梅市の**笑い地蔵**（金剛寺の周り。同市ホームページ）

むかし、金剛寺に、前を通るとゲラゲラ笑う地蔵さまがあった。あるとき、物好きな侍が通りかかった。侍が前を通り過ぎようとすると、やはりゲラゲラ笑いだした。侍は、一刀のもとに地蔵の首を切り落とした。すると、不思議なことに、地蔵さまの首から真っ赤な血が噴き上がったそうだ。

「笑い地蔵」の伝承は中世から存してる(37)。美濃国墨俣河辺りの地蔵や、大坂大願寺の地蔵が、橋の建設に当たって、公卿が人柱（ひとばしら）説話にちなむ和歌を上手に詠んだので、喜び感じて笑みを浮かべたとの所伝である。右の青梅市の伝承は、地蔵が笑い声を発したとの怪異に関心が向いて、「笑い地蔵」と呼ばれている。しかしもともとは、地蔵や石造物が夜に人に化けて歩きまわり、それを不審に思った侍が斬りつけ、血がこぼれる。後刻、その跡を侍がたどっていくと、からだの一部が欠けた地蔵を見いだして、地蔵が化けたと知るという説話だったのであろう。『広文庫』はそれを『八尾地蔵通夜物語』三、『雲根志』後編二、市井雑談集・上から引いている。

地蔵尊像が右手に錫杖をたずさえるのは、六道を廻って衆生を救うとの教理にもとづいている。六界を巡行するのである。人間界では仮の姿での出現であり、夜での独り歩きとなる。

なおまた、地蔵説話はその立ち姿や、巡るおりは筍笠をかぶると語るのが通例である。宝永元年〈1704〉刊『地蔵菩薩応験新記』(38)の「加州金沢大円寺石地蔵菩薩　禁獄の難をすくはせ給ふ事」(中末・2)を抄記する。

（元禄十四年のこと、老母が息子の病気回復を）「遍く仏閣神社に詣して此事を祈求す。大円寺の延命尊を初、六所の地蔵尊に巡礼して現証を希ひ、至心に懇祷して輟ざりけり。九月十六日夜、夢に当寺の石像、筍皮笠を被、老母が扉を款き、宅に入せ給ひて曰、「汝、子の事を我に祈ること劇切なり。来れ。汝が子の在所を親見すべし。

続けて、「加州江沼郡山中村桂地蔵尊入湯の人の眼病を痊し給ふ事」(同5)も抄出する。

（元禄十一年のこと、加賀の金沢野町の商人の松谷長右衛門という者は、子どもがふざけてその眼を打つと、両眼に痛みが出て苦しみ、ある人がいうに、桂地蔵に祈願すれば治ると聞いて、お参りして）その水を掬して両眼を洗ければ、痛腫忽除、双目清瞭として数日の患難一時に消散しけり。複、宝前に拝詣し、深く謝陳し奉り、浴湯、日を指して快験を得、積痾悉く除き、身心安楽にして金沢に帰とて、慈恩に酬ひ奉の表忱なりと、大なる箬笠を求て被しめけると也。

図⑥（埼玉県狭山市入曽の化け地蔵）

豆腐小僧と地蔵は常時、笥笠なのであった。ちなみに、鳥山石燕『画図百鬼夜行』（安永五年〈1776〉刊）の「獺（かはうそ）」は笥笠を、『今昔画図続百鬼』（安永元年〈1772〉奥付）の「雨降（あめふり）小僧」は破（やれ）唐傘をかぶっており、水木しげる画、村上健司編『日本妖怪大事典』に受け継がれている。

② 狭山市入曽（いりそ）の**化け地蔵**（下和泉の地蔵尊）（同市ホームページ）

旅人が夜に地蔵尊のところに通りかかると、ギラギラ光る目だま、大きな口のものが現われた。近くの農家に逃げ込んで、わけを話すが、信じてもらえない。一緒に出かけてみると、そこにスイカ提灯がぶらさがっていた。誰かのいたずらと思ったが、念のため荒縄で縛った。なお、縄で縛るのは、願い事を祈願して、あるいはそれが叶ったときに、謝して縛ったとも伝える。一説に、旅人は侍であり、刀で斬ったと伝わる。二体のうち、向かって右側の地蔵様は背丈が低く、首がないとされる。（図⑥）

③ 群馬県吉岡村 方貝薬師堂の**肩切り薬師**（39）

ある秋の夕暮にな。大久保の上ん町から金竹西を通って、池端へぬける曲がりくねった道を、男が一人で通って行ったんだとさ（略）。どうせ上ん町にいた博打うちの親分の大久保一家に留めてもらうことができねえんで、近道をして金子の方へと思った旅がらすだんべえ。でっけえ笠かぶって縞のかっぱを肩にひっかけて道中差しを腰にぶっこんで、そういう若けえ博打うちがよく通ったもんだとよ（略）。

すると、やくっしゃま（薬師様）のお堂のあたりが、ぼーっと明るくなったと思うと、色の真白なきれえな女が現れて、黙って手を出しておいでおいでをするんだとさ。

男はぶったまげて腰を抜かすとこだったんだけど、そこは「不精」者で、切ったはったのけんかざたを繰り返してきた博打うちだから、度胸がすわっていたんだんべよ。こいつはてっきり狐か狸の仕業と思って気い落ちつけて、刀の柄（つか）に手えかけて、そおっと近づきさま思いきってええーいと切りつけたんだとさ。するってえと、石か鉄を切ったんみてえにカチンと音がして、パアーッと火花が出て刀がまっぶたつにおっかけちまったとさ。男はおっかなくなって、夢中で大久保宿まで逃げてきたんだと。

この話を聞いて、村の連中が翌朝みんなしてやくっしゃまで、そおっと行って見たんだけんど、そこには狐も狸も女もいなけりゃ、血の一滴も落ちてなかったんだとさ。しかしなあ、おったまげたことには、石で造ったやくっしゃまの本尊様の肩が三寸ぐれえひび割れて、そこへおっかけた刀が突き刺さっていたんだとよ。宿に帰ってきて、みんなにこの事を知らせていると、やくっしゃまを切った男の手足がだんだんしびれて動かなくなっちゃったんだとさ。

そこで、村の年寄りや物知りの連中がみんな集まって、こらあどうしたことかと相談したんだと。そのあげく、こいつは、なげえ間、やくっしゃまをあんまりお参りもしねえし、その辺も草ぼうぼうで、こかまねえでおいたから、やくっしゃまが現れて、「もっとお参りしろ」といったんだんべえと話がまとまったんだとさ。

それからは、お堂のいいのを造ってやるし、みんなしてお参りもよくしたんだと。何でも目のわりいんとか、子供の病におがんしょうをかけると良くきいたんだと。そんで、なおると石で造った仏様をお返ししてなあ。

だから、今でも行って見ろ。あのあたりには石で造ったちいせ

い仏様が何百何千体ところがっているだんべえ。そん時から、あのやくっしゃまを誰がいうとなく、肩切りやくっしゃまというんだとさ。（はなし 大塚フク）

薬師如来は病気平癒に霊験があるとされ、それは地蔵菩薩の六道での衆生抜苦に結びつき、本話は形成されたのであろう。類話には地蔵の応化とするものが多い。

たとえば京都府宇治市の白川に、文字通り、「肩切地蔵」が、また大阪府高槻市の天神町に「片袖地蔵」が伝わる。前者は、寺侍が碁にこって夜に宇治まで打ちに出かけていたが、峠の地蔵尊に礼拝せずにいると、ある晩に若い娘に出会い、狐狸の仕業と思い、一刀で斬りつけ、谷底へ蹴落とした。その後に、夢にその地蔵尊が現れた。翌朝確かめたところ、肩口に斬りきずのある石地蔵が落ちていたので、村人たちと運びあげ、道端に安置した。地蔵尊は、不信心の侍を戒めるため、みずから娘に化して出られたと伝わる（本山桂川原著・奥村寛純増訂『新編日本地蔵辞典』）。

後者は、むかし、西国街道の芥川宿の宿屋に評判の美しい女中がいた。そこに泊まった侍に求婚されたが、きっぱりと断った。その女中が夜中になると独りで裏口から出て行くのを、未練を残した武士は跡をつけて、草むらでうずくまった。てっきり男とあいびきをするのだと思い、背後から一刀のもと肩先を斬りつけた。翌朝になると、その女中はちゃんといるので不審に思い。草むらをたしかめると、そこには石地蔵が立っていて、その肩袖が切り落されている。地蔵は女中の身代わりをされたのだと謂われる。（同）

④ 吉岡村の**横塚の怪談**（徳田補記「化け石像」の怪）（40）

今は昔、上毛野国、桃井郷、野田の里に横塚という松杉の古木が茂っている古い塚があった。此の塚に妖しい者がいて、毎夜、出ては人を貪り食らい、家畜を掴み殺すという話が遠近に伝わり、人々騒ぎ恐れること一方ならず、あれ程にぎやかだった伊香保街道も、申の刻（四時頃）より後は止むを得ないような用事をかかえた人すらも、通らなくなってしまった。そのころ、この里に森田安次といって上泉伊勢守秀綱から教えを受けた新陰流の達人が住んでいたが、困ったことになったと思い、彼の妖怪を討ち果たしてやろうと秘蔵の太刀を腰にして、件の塚のそばで待っていた。この妖怪は安次の勢いに恐れたのか、待っても待っても一向に姿を現わさない。

そこで、自分の姿形を変えてみようと思い、伊香保の遊女の着物を借りて、女の服装をし、朧月夜の明け方に、伊香保からとぼとぼと下ってきた。横塚の近くに来ると、一天俄かにかき雲り、梢を鳴らす村雨が降って来たか見えたが、忽然身のたけ二丈余りの大入道が鏡のような眼を怒らして、こちらを向いてにらんだ物凄さ、顔は朱を指し、緑青でくまどりしたようなのが、鬼の手を広げて、掴みかかろうとした。さては、妖怪出てきたなと外から冠っていた衣を脱ぎ捨てるや、腰の太刀を抜き放ち、続け様に三太刀ばかり切りつけた。確かに手ごたえがあり、「あっ」という声がして、物が転げゆくように風がやみ、雲は晴れて、東の空は明けてきた。

ころげて行ったと思われる辺をよくみると、昔から塚の上に立っていた石塔に刀きずがついて横倒しになっていた。このこと以来、妖怪が出なくなったと伝えられている。此の太刀が伝わって、当時の里長であった森田門右衛門、今は森田寿次郎の家に保

存されているという。石塔は、その跡に立てても立てても倒れて、立っていることはないといい伝えられている。（略）

《民間伝承編》

① 新宿区袋町（地蔵坂）光照寺の**子安地蔵**（41）

光照寺の子安地蔵は三井寺、増上寺と伝わった由緒ある地蔵様である（略）。光照寺の境内には昔は大きな榎が林をなし、榎の根元に抜け穴があって狸が棲んでいた。何分地蔵様が繁昌するので、狸がめったに穴から出ることも出来ず、何とかして人の来ない様にしようと狸は考えた。それには化けて人を驚かすに限ると、狸は代はるがはる化けて出ることになった。日が暮れると、門前の地蔵坂に、時々、石の地蔵様になって現われる。附近の人達は変な地蔵様だと思って行き過ぎると、地蔵様が声をかける、錫杖を振り廻して歩き出す。その内に入道になって笑ひ出すと云うので、地蔵坂の化け狸と云つて、人々恐れをなしたものだ。

享和頃（徳田補記1801-3年）の話だが、払方町に棲んでいる侍が、日暮れに寺の門前を通ると、地蔵様が錫杖を突いて坂を登ってくる。テツキリ化け狸の仕業に違いないと思つて、抜打ちに切りつけた。すると地蔵様は錫杖をもって発止と受けとめた。ナンノ小癪なと又切り付けると、これこれ何をなさると声を掛けられ、よく見ると、それは狸ではなくて、日頃懇意な侍であった。彼はその訳を話して粗忽を謝した話がある。

私が先だって光照寺に行つたとき、糸山老師に狸の話をしたら、境内には明治の中頃迄、狸が多く居つたもので、随分悪戯をされたものだ、今でも一匹居るようで、時々庭先に出て来ますと話されたことがある。

この伝えは、化け地蔵説話が怪異譚と認識されて、しばしばそれを引き起こすとされた狸の変化話となっている。言い換えると、この場合の地蔵尊は化け物とも看做（みな）されているのである。

② 新宿区西大久保の**鬼の手洗石**（cf.石燈籠等）（42）

稲荷鬼王神社に鬼石が奉納されたのは、天保五年（1834）である。大久保に加賀美某の屋敷があった。この庭に手洗石があった。天の邪鬼が手洗石をかついでいる形である。

ある夜、庭で水を浴びているような音がした。水音はするが人の姿はみえない。しかも水浴びは毎夜続いた。そこで加賀美某は怪しんで、ある夜、家伝の宝刀を抜いて、水浴びをしているものにめがけて袈裟がけに切りつけた。そして翌朝見ると、手洗石の邪鬼の肩の一部に刀で切りつけられたきず跡がついていた。水浴びをするのはその手洗石の邪鬼であることがわかった。

ところがそれ以来、水浴びの音がしなくなったが、家族に病人が出るので困った。そこで、手洗石を稲荷鬼王神社に奉納してみた。すると、病気になる人がいなくなったということである。

なお、宝刀は「鬼切り丸」といわれて加賀美家の家宝になっていた。この伝説を刻んだ碑も建っている。また、この手洗石に水を注ぐと、熱病や子どもの夜泣きが直るといわれた。

近世末期の化け物退治譚が、刀を「鬼切り丸」と呼ぶと語るのは、中世の宝剣説話の型である。

③ 新宿区矢来町の**化け石**（43）

矢来の酒井若狭守の下屋敷の裏通りは、淋しい気味の悪い道で…、ある夜、酒井家の力自慢の武士が独りで提灯もつけずにこの道を歩いてみた。すると、怪しい人影が大仁王のように道に立ち

はだかった。

武士は、さてこそこれだなと思い、近づくといきなり抜き打ちにその人影を切りつけた。たしかに手ごたえはあったが、大仁王の姿はもうなかった。

翌る朝、昨夜の場所にいってみたが、人の切られた痕は全くなく、路の側に大人ほどの青石があり、それに新しい刀きずがついていた。

これを聞いた酒井の殿さまはその武士の勇気をほめ、その石をそこに保存するように命じた。

参考として、台東区上野寛永寺の与兵衛狸伝説を概略紹介しておく（『江戸の口碑と伝説』）。与兵衛狸は、池の端の「千づか」という菓子屋に、小僧に化けて現れていた。ある日、山伏に化けて現われた時、正体がばれてしまい、彰義隊の戦争を予言する。

④ 古河市茶屋新田の**化け地蔵**（44）

相模屋の酒盗んで、殿様が通る時にね、地蔵様が化けて出て、そんで片腕をもぎ取られたって。で、茶屋の地蔵様だけは片腕がねえんだって。

茶屋新田の、旧日光街道の西側、松並木のちょっと入ったところに、昔から五基の石仏が立ち並んでいた。いつのころからかその中の一体の石像が、夜な夜な人間に化けて、街道を往来する旅人を驚かした。

或る時、仙台侯が、江戸から国表へ帰国の際、行列を連ねて、夜分、日光街道をこの松並木に入り、茶屋新田の石仏の立ち並ぶ辺りへ差しかかると、並木の松の間から、その行列の真ん前に、突然、手拭いを吹き流しのようにかぶった一人の女が立ち現れた。行列の供先の侍がそれを見て、「行列の供先を汚がす奴、女子とて容赦しないと、その侍が「エーイッ!!」と気合もろともに斬りつけた。ところが、カチーンと音がして、闇に火花がとんだ。はて面妖なと、斬りつけた侍は、余りにも激しい手応えに、太刀を振りかざして、つくづくみつめたが、血痕も付いてなく、刃が少しこぼれていた。

そして、よくよく辺りを見廻したが、怪しい女の姿はなく、その足元に石の腕が一個斬り倒されて転がっていた。侍の斬り落としたのは、人間の女の腕ではなく、石地蔵の片腕であった。

この話は歌舞伎座で上演されたというが、その演題や役者の名は不明である。問題の石地蔵はそんな伝説を秘めて、今では道路拡張のため場所を移動して、街道から少し入ったところにある墓地の脇に、他の石仏と共に建立されている。この地蔵は正徳四年（一七一四）建立の、光背型十六夜念仏供養塔で、大分風化しており、村人の話では、右手が斬り落とされて無いというが、それは見ようによっては、崩れた尊体からそんな感じがしないでもない。

《古文献編》

①『**狂歌百鬼夜狂**』（天明五年〈1830〉序、刊）（45）

「化地蔵」

あやしみをみする地蔵は六道の能化（のうけ）の文字をあらはせしかも

（妖しい様をみせる地蔵は、六道で能化して衆生を救うとの教えを体しているのだろう。）

②『**誹風柳樽**』122篇。1765年初編、1838年終編）（46）

図⑦（注20『狂歌百物語』より）

図⑧（『昔語質屋庫』口絵、国会図書館デジタルライブラリー）

抜打に切れば火の出る化地蔵

③『**地蔵菩薩応験新記**』（注38）一－12「加州長井谷村伝灯寺石地蔵由来幷霊験の事」

（その昔、仏林慧日禅師が法灯国師の印を帯びて長井村に来たとき、寂しいところに一人の女が紡績をしていた。女は自分の夫は山賊であるから命が危ない。林の中の地蔵堂に身を隠せという。夫が帰って来て、刀を抜いて暗い中を斬った。）翌朝来看れば、禅師自若として端坐し給ふ。地蔵の鼻端に刀の痕あり。渠大に懺謝し、即髪を剃り、弟子と為て随侍す。師、此地に精藍を建。今の瑞応山伝灯禅寺是也。其傍に堂宇を営構して地蔵尊を鎮守と称ず。

これは化け地蔵説話と結びついた、いわゆる身代わり説話である。

④『**狂歌百物語**』（嘉永六年〈1853〉刊）（47）。狂歌27首の内、10首を抄出。

「化地蔵」

茶園にて片目潰した色地蔵　夜あるきに何浮かれたりけん
草加　四角園

われ（お前）言うな俺は言はぬと石地蔵　其誓言も堅き言の葉
陽昇庵雅学

女にも化けて出でぬる石地蔵　堅いものとは思はざりけり
草加　四豊園稲丸

草深き野鳥に化ける地蔵見て　狐狸もおそれなしけり
三輪園甘喜

化地蔵見れば両手に持ち給ふ　たまげながらにおこす錫杖
神風屋青則

化地蔵今も残れる太刀疵の 跡ありありと袈裟掛けの跡　西馬

化地蔵破れし衣の刀疵 袈裟懸掛けのあと残る辻堂　日年庵

手も足も目鼻も欠けて辻堂に お化けと見ゆる石地蔵かな　参台

旅人の刀も錆びし化地蔵 切りつけてある施主の名までも　銭の屋

延命の唱へも誓ふ化地蔵 見ればたちまち縮む魂　豊の屋

なお、『狂歌百物語』の化地蔵の絵は、子どもが地蔵に饅頭を捧げるさまである。（図⑦）子ども（後ろ向き）が右手でその盆を差し出すと、地蔵が頭を下げて謝している。その姿は、子どもにみえるべくもない。この絵に対応する説話は、『砿石抄』所載の「飯食い地蔵」であろう。男の子が継母に邪険にされ、継母は飯を石地蔵に供えてこい、もし地蔵が食べるようであったら、お前にも食わせるという。子どもは供えに行くも、背が小さくて地蔵の手に届かない。子どもは泣きながら、お地蔵さま、どうかお取り下さいというと、地蔵は御手をのばして受け取った。

継母はこの話を信じない。念のため、行ってみると、地蔵の右の手には握り飯が半分ほど握られ、口の周りには飯粒が付いていた。継母は驚き恥じて、子どもを可愛がったという。

また、『地蔵菩薩応験新記』上末1「越中国氷見町朝日山上日寺地蔵尊の霊験附糍 粑地蔵と号る事」とモティーフが共通する。けちな女人がおり、人びとが信仰しているのを嘲笑い、密かに尊前に献じ置、「地蔵殿、真の霊仏ならば、此糍を食れよ」と言て帰、翌朝参詣してこれを見ると、器内の餅に歯形つきて、大士の御唇に餅糍黏し伝けり。」といった具合で、女人はそれより帰依、尊信して「餅餐地蔵」の名は世上に伝え播ったという。

⑤ 滝沢馬琴『昔語質屋庫』（文化七年（1810）刊）口絵（48）

＊口絵。右丁の上部、侍が化け物を斬る。下部、地蔵の額から血が吹き出ている。

わが相模路なる石地蔵は化けて、旅人に斫られたり。…これ正しく質物の妖怪にてやあらんずらんと…、皆これ年頃にこの庫に籠めたる諸方の道具質が仮に形状を顕はして、おのれおのれが世をはかなみ、憂き身を語り慰むなり。（図⑧）

⑥ 滝沢馬琴『狸和尚勧化帳／化地蔵畧縁起化競丑満鐘』（寛政一二年〈1800〉、浄瑠璃読本（49）

（開巻のあらすじ）「化物国」の領主見越家の家宝文福茶釜が盗まれ、それを預かっていた狸（狼婆）は、女房雪女と一子川太郎を抱え、浪々の身となって茶釜の行方を尋ねる。その狸の隠れ家に、主君のろくろ姫が訪れて、行方不明の恋人白狐之介に会わせてほしいと頼む。姫は、お家横領を企む執権職の猫亦天狗（猫又にやん平）に家宝紛失の罪をきせられ、追われている身の上である。狸は、姫をこんな窮地に陥れたのも、自分が居眠りをして茶釜を盗まれたためと、命にかえても姫をかくまう決心をする。（川太郎は実は「豆腐小僧」。化物は他に「三目入道」「獺」「窺鼬鼠」「船幽霊と底の抜けた柄杓」「姑護鳥」などが登場）

…狸が一子川太郎、まだ九ツの藪育、竹の子笠を打冠り、盆に豆腐の小半丁、ちよこちよこ走る頭勝、かの赤本に畫いたる、とうふ小僧と見えにける。切戸口からコレと、さん、今戻りましたぞや。オ、出来した出来した、大分おとなしうなりをつた、したがコレ川太郎、父が云ふことようわきまへよ。其方はどう云ふ生れ付きか、頭の皿へ水が溜ると、子供に似合ぬ力が出て、人を投げたり、ほかしたり、モ様々のほて、んごう、川だちは川ではて

ると、よう人なみの化物になりをるまい。（略）（「中の巻」「箱根の先化住居の段」）

化物の旅はと問へば道もなく、蜘蛛の巣に似たやれ笠に、鷹の化したる鳩の杖、一寸法師に大頭、脚絆いらぬ幽霊が、肩にしだるゝ柳揚骨、行き来ふなりもさまざまの、妖怪変化に合の宿（略）、同行の小化物、コレハコレハ山男殿、今日はいかい御馳走、イヤモありがたいことで御座る、わし共が口から、かう云ふは勿体ないが、アノ和尚様は正真の化た地蔵様じや、はて何故と云はつしやれ、加持がようきく祈祷がよし、（略）程なく伴ふ化和尚、頭巾に包む頭勝、よぼよぼ立出で数珠つまぐり、（略）心をこめて相模なる化地蔵に誓願かけ、百日通夜せし甲斐あつて、（略）倅の首と思ひしは、石の地蔵の御みぐし、娘にあらぬ地蔵の宝珠、（略）親の行方を尋んため、化地蔵へ誓願をかけ（略）と聞きしはまさしく化地蔵の身代りに立せ給ふか、（略）誓は石に太刀の跡、其名も高き化地蔵（略）、地蔵菩薩の利生にて、二人が命助かりし、…。（「下の巻」「山男旅籠屋の段」）

「とうふ小僧」などの化け物が、「石地蔵」「化地蔵」の利益を請けていると叙しているのは注目される。

⑦ 菅江真澄『鄙廼一曲』（50）「いでは陸奥ぶり、盲聲人物語　世に早物語といふ」

「蓼地蔵」（仮題）

こゝに蕪左衛門と申して男一人候ひしが、かの男、金にも銭にも事欠かず、たゞ摺小木にはつたりと事欠いて、あたりをきつと見給へば、親重代の古ル地蔵のおはします。かの地蔵のお前を、御免なれとて真逆様に押し立てて。摺らば唯も摺りもせで、すつてんぐわらぐわら、りんとんぐわらりん、しやんぐわらりんと摺りまはし、元の如くにおつ立直して見給へば、かの地蔵の頭より、南蛮塩まじりの蓼汁が、垂らばたゞも垂りもせで、だらりんだらりんずつたらりんとも垂りければ、かの地蔵一化ケ化けたる地蔵の事なれば、舌をべろべろこんこん、かいべろこんともつん出して、あら辛いや辛すつからと、小首を振つておはします。親重代の古地蔵一化化けたる物語。

⑧『蚤虱地方あらそひ』（幕末～明治初期写本、徳田蔵、注50参照）

「蓼地蔵」

それ壱ツ物語語り候ふ。爰に四方五郎と申して、銭にも米にも金にも事を限りしが、ひよんなる物に事をはつたと欠き、有る時蓼味噌を擂らばやと思ひ、擂鉢に蓼と味噌とのこのこ壱杯切り込み擂らん、思ひは擂木に事をはつたとかき当だり、きんしゆをきろりんきろりんきんきろりんと見まはせば、持仏堂に常に念づる立地蔵、是ぞ擂木にせばやと思ひ、真つ逆様におつ取り直し、からりんからりんきんころりんと擂りければ、此の地蔵もいせばがな地蔵にて舌をべろりんべろりんべんべろりんと足しながら、件の蓼味噌、けたりんけたりんけんけたりんと舐めければ、四方五郎、これを見て、さてはこれこそ生地蔵、粗末にならんと、元のごとくにおつ立てなをし、信心合掌怠らず拝せば、御利生ましまして、富貴繁昌に栄へたるとの物語。

Ⅵ 江戸の豆腐地蔵

先の第Ⅱ章で、福島、山形県の「豆腐地蔵」の利益譚に触れたが、ここでは江戸の「三豆腐地蔵」の縁起物語を取り上げる。これは前章

の化け地蔵説話の一型である。これまで、カバット氏が豆腐小僧を論じる中で、豆腐の伝説として東福院の豆腐地蔵説話（後掲）を要約して紹介し、「化物の豆腐小僧との直接的な関係を見いだすことはできない」(51) とするが、私は諸点から大いに関係すると捉えるものである。

① 長龍寺豆腐地蔵

「区案内碑」

杉並区の高円寺南2町目の長龍寺（當衆山、曹洞宗）は、麹町四番町（現千代田区四番町）に開創され、元和二年（1616）に市ヶ谷左内坂（現新宿区市ヶ谷左内町）に境内地を拝領して移転し、明治四二年（1909）に陸軍士官学校の拡張に伴い、この地に移転した。

「杉並区指定有形民俗文化財碑」文（平成二年十一月十四日付）。

石像地蔵菩薩立造一基　本像は江戸時代の宝永五（1708）年に造立された等身大の石仏です。像容は端正で、容貌も整って尊顔を表し、衣紋などの彫刻も丁寧で流麗に仕上げられています。本尊の右耳は欠失していますが、当寺の『長龍寺縁起』にその由来が記されています。元文年間（1736-41）の頃、小僧に化けた地蔵が豆腐を買いに行ったが、木の葉の銭を使用したため怪しまれ、斬られたというもので、そのことから石像は豆腐地蔵と呼ばれています。

杉並区教育委員会

＊『長龍寺史』抄出(52)

長龍寺の門前に、坐像の石地蔵が安置されています。台石に「常燈明 本施主館藤助 永代毎月油一升宛 伊勢屋宗七郎 同万人講中」と刻まれているのは、これを造立した人々が、燈明につかう油を毎月一升ずつ永に奉納することを約束したものです。その側に「山之手二十八番内第十一番地蔵尊」と刻された石柱がたっています。寺内に祀ってある、いわゆる「豆腐地蔵」の道標です。

旗本寺・長龍寺には、江戸庶民の信仰対象だったこのような尊像が祀られていたわけです。

江戸「山の手二十八所地蔵尊参」は、『東都歳時記』に「本願経二十八趣の利益にもとづき二十八とす云々」と記され、二十八カ所参りの道程は三里ほどと書かれています。…「十一番　同（市谷左内坂上）長龍寺へ…

さて、十一番長龍寺の「豆腐地蔵」は本堂の手前左側の地蔵堂にこんにちも祀られていますが、それには次のような伝説が残されています。

むかしむかし、市谷左内坂下の豆腐屋に、いつも日暮れどきであったが、豆腐を買いにくる一人の僧があったそうな。ところが、

図⑨（長龍寺 豆腐地蔵尊）

妙なことにこの僧が買いにきた日にかぎって、あとで勘定をしてみると、きまって売り上げの帳尻があわぬ。それもそのはず、銭の中に木の葉が一葉まじっているのであった。これは、さだめて妖怪変化のたぐいのしわざであろうと、店の主人がある日、例のごとく日暮れ時分に豆腐を買いにきたその僧のあとをつけていくと、かの僧は坂上の長龍寺の山門の中にすうっと消えたのだそうな。

お坊さんがまさか妖怪でもあるまい、と主人はおもったが、不思議なことに違いないから、その筋に届け出た。この噂はたちまち町じゅうにひろまったので、時の寺社奉行（山名豊就）は配下の清水兵吉という者に命じて僧の正体をつきとめさせることにした。

そして数日後のことだった。夕暮れどきに、豆腐屋からいつものように豆腐を買って僧が出てきたので、清水兵吉はあとをつけ、途中で呼びとめたのである。が、平吉が「おいおい、そこな出家よ」というやいなや、くだんの僧は突然逃げだしたのだった。平吉は追いかけた。そして抜きうちに斬りつけた。その瞬間、なんとも不思議なことに、僧の姿は忽然と消えたのだそうな。

不思議なことはそれだけではなかった。そこに、血のついた小さな石片がぽつんとあるのだった。平吉は血痕をたどっていく。それは長龍寺の中の地蔵の前で消えている。

見ると、その地蔵は右耳から肩先にかけて立ち割られて、平吉をごらんになるその御眼がなんとも怨めしげである。さては、くだんの僧はこのお地蔵様の化身だったのか、お地蔵様は豆腐が大好物だったのだな、と気づいた平吉は、深い懺悔の念にとらわれた。

清水平吉はその後出家して「徹了」の僧名で長龍寺の弟子となり、生涯、地蔵の供養につとめた。豆腐屋の主人も、もとはといえば、自分の届け出から生まれた一件だったから、これも大いに懺悔するところあって、それからは一日一度は長龍寺に地蔵参りをすることを欠かさなかった。

その効験あってか、ためにその豆腐屋はすこぶる繁盛するようになり、この右耳の欠けた地蔵は「豆腐地蔵」とよばれ、江戸の豆腐屋の信仰をあつめ、やがては江戸庶民の商売繁盛の守り地蔵として、慕われていったのだそうな。」（図⑨）

長龍寺の豆腐地蔵、また喜運寺（第一九番・文京区白山）、東福院（新宿区若葉町）のそれをあわせて〝江戸三豆腐地蔵〟といいます。たとえば喜運寺のばあいは、木の葉の銭が石ころの銭であった（『遊歴雑記』）というように少しずつ違う点もありますが、だいたい同じような伝説が語り伝えられています。

なお、当寺豆腐地蔵は、寿星・岡山丘作氏の『江戸事蹟浪曲編纂』の第四十七回作品に作詞されています。その詞は「名にし東（あずま）の名所図会、江戸の昔の面影を、豊かに残す御事蹟、馨も今に馥郁と、由緒も尊き長龍寺、常盤の松の苔蒸して、寺門興隆弥栄（いやさか）え、事蹟と伴に伝はりし、豆腐地蔵の御由来（略）」というものです。

この伝説が生まれたのは、一説に寛保年間（一七四一～四四）のこととされています。すなわち九世光温存清和尚の代のことです。豆腐地蔵は、宝永山（富士山）大噴火の翌五年、その犠牲者の供養として建てられたと思われます。

豆腐地蔵は、前記したように他の寺にもありますが、当寺のそれは大変大きいのが特徴です（身の丈百七十センチ程度。裏面に宝永五年八月と刻されています）。

図⑩（喜運寺 延命豆腐地蔵尊）

②喜運寺（文京区 曹洞宗）豆腐地蔵

「希運寺豆腐地蔵尊」（十方庵〈大浄［津田］敬順〉文政一二年〈1829〉完稿『遊歴雑記』三編下）(53)。

東部小石川戸崎町に、名高き豆腐地蔵といふは、希運寺曹洞の境内より入正面にあり。斯く異名をよぶ事は享保年間の事かとよ、当寺の門前町に豆腐屋のありけるが、毎日時も違へず、日暮れに及び、八、九歳計りの小坊主来たり、豆腐小半挺づつ買ひて、持ち帰る事、毎晩闕かさず、されど何方より来たるとも尋ねもせず、過ぎ行けり。

しかるに豆腐屋には店の雨戸をさし堅め、諸具取り片付け、売り溜めの銭箱を打ち明けて、その日々の銭の員数を改め見るに、いつとても小石六つ七つまじり入る事定式なり。但し、上にいふ小坊主の豆腐買ひに来たらざる日は極めて小石なし。

此の事ふと心付くより、試し見るに、更に違はざれば、是より件の小坊主は狐狸の変化たる事を知りて、家内申し合せ、若し来たらば、己れ目にもの見せんと手筈してありけるが、案に違はず、その日の黄昏、店さし時、閙しき最中、彼の小坊主来たり、例の如く豆腐小半挺を買ひて帰る。うしろをやり過ごして、豆腐切りの包丁を以つてのしかかり、右の肩先を力いつぱいに打ちければ、一声きやつといひしのみにて姿は消えて失せたりけり。

能い気味なり、さだめて血や引きぬらん、何方より来たりしぞ探さばやと、灯を照らし見るに、年暦古し石の片破ありて、水のごときもの流れ、此の水跡は希運寺中の地蔵堂に止まりたり。扨は此の堂の椽下にや屈み居ぬらんと、寺中の者折りかさなり取り取りに評議し、不図堂中の石地蔵をみれば、こはいかに、地蔵尊の右の肩先をはすに打ち破りてぞありける。

人々驚き、件の打ち落とせし片破を合せ見れば、毛筋だにも透かず符節の合ひしまま、扨は是まで小僧と見えしは地蔵尊の化現なる事をしり、全くは豆腐屋夫婦のもの、慳貪邪見にして、露ほども善根處にこころざしのなきを不便に思ひ賜ふての事ならんと、地蔵の霊験遠近に取り沙汰しけるが、去るにても此の石像は豆腐を好み賜ふらめといふより、心願あるもの豆腐を供じ参詣するより、いつとなく豆腐地蔵と異名をよぶ事とはなりぬ、と。

但し件の怪我し賜ふ石像をば宝庫に蔵して、今は石像の別物を安置す。仕合はせなるは此寺、日々豆腐に事を欠かず、上下とも僧俗喰飽する事になん。（図⑩）

②『新撰東京名所図会』小石川区之部」(54)

「小石川区之部 喜運寺」

八十二番地にあり。光国山と号す。禅宗曹洞足利長林寺末なり。境内に豆腐地蔵尊あり。小石川志料（三）に云。住僧の話に、尊像は往古桜田に於て拝領のよし。相伝ふ。この尊像、故有て豆腐屋に左の手を切られ給ひし事あり。それより豆腐地蔵と名付けり。十三世逸元の時正徳元年に、彼左手を接ぎしと。もとより別の石なれば、石理も合はず。されど秘仏なれば他人の拝を許さずと云。豆腐屋の事跡、正敷浮屠民の虚誕なれども、伝ふる侭を記せり。

「喜運寺境内石碑文」

曹洞宗光国山喜運寺　開山勅許陽心宗正続禅師源室永高大和尚慶長元年（西暦一五九六年）桜田門内に草創。慶長九年江戸城拡張の為駿河台に移り、更に元和年中お茶の水上神田に移り明暦の大火で類焼後小石川村に移り現在に至る。

「延命豆腐地蔵尊の由来」

江戸享保の頃当寺前の豆腐屋へ毎夕豆腐を買いにくる小坊主があり、代金が小石や木の葉になってしまうので狸のしわざと思った店の主人は、ある時小坊主の後をつけた所喜運寺の地蔵堂内の地蔵尊の化身であることを発見し、豆腐地蔵尊といわれるようになった。またいつの世からか子どもの病気平癒や乳の出ない産婦にききめがあり、そのお礼に豆腐を供えるようになったという。（遊歴雑記より）なお延命豆腐地蔵尊は関東大震災戦災いずれも難を免れ無事であり現在に至っているが秘仏になっている。

cf.「ふしぎなことがあったとさ とうふ地蔵」(55)。（略）

cf. 柳田國男「地蔵殿の苗字」(56)

江戸という大町は地蔵霊験のまだあらたかな時代地蔵信仰の盛んな地方にできた城下である。（略）『十方庵遊歴雑記』第三編の下にも界隈の多くの地蔵の苗字を挙げている。いわゆる子守地蔵、子育地蔵、腹帯地蔵の数は子安の系統に属することが分かるが、日限地蔵、艶書地蔵、頬焼地蔵、落涙地蔵、塩嘗地蔵、蕃椒地蔵、水飴地蔵に至っては、名の由来に一々の隠れたる伝説があるらしい。（略）場所の知れているのでは、深川本誓寺の花掛地蔵、『武江年表』には鼻欠地蔵とあって、享保三年二月十五日より流行し始めたと見えている。同じく六間堀要津寺の拍子木地蔵尊、これは御礼に拍子木を奉納する。浅草砂利場の文箱地蔵は艶書地蔵の亜流であろう。（略）早稲田には賢勝寺の疣地蔵、また落馬地蔵というのもある。地蔵の気風の甚しく荒かった時代の遺物である。駒込では土物店常徳寺の身代地蔵、また片町大円寺の炮烙地蔵、この寺門外の石地蔵は笠の代りに炮烙を被ってござった。小石川には餌差町善雄寺の引接地蔵、同じく戸崎町喜運寺の豆腐地蔵は、豆腐がお好きとてこれを献納する者多く、寺僧、豆腐には不自由せなんだという。これについて一条の話がある。（以下、段落変えは徳田）

享保年中（1716-36）この寺門前の豆腐屋に毎日夕方、八、九歳の子供が豆腐を半挺ずつ買いに来る。勘定の時、見ると銭箱の中に小石が六つ七つ雑っている。きっと化物ということで、ある夕、待ち伏せて豆腐包丁で子供を切ったところが、後で見ると古びた石の破片が落ちており、堂の中なる石地蔵が右の肩先を切り取られていたという。石地蔵の化けて斬られたという昔話には深い仔細があるかと思う。例の多いことである。（略）

同じ『遊歴雑記』第二編の上に、今の埼玉県南埼玉郡荻島村大字野島の浄山寺の延命地蔵は慈覚大師一刀三礼の御作、俗名を片目地蔵、摂化随縁の御方便さまざまにして、ある時は茶畑に入っ

て目を損じ、これを洗わんと門外の池水を掬びたまいしより、今に至っても池の魚も皆片眼である。この地蔵、夜な夜な出でて隣里を遊化せらるるをもつて、住職紛失を恐れ御背に釘を打ち鎖にて繋ぎしかば、たちまち業病に罹つて死す、云々。信徒の者、子を設けたる時は、地蔵に向つて請状を出し、その子を地蔵の奉公人としておけば、無病息災であるという。この話には金岡の馬の物語、いわゆる化地蔵の物語、片目の魚の話などが雑然と織り込まれてあるほかに、近頃まで存している、かりに子を棄て子を拾う風習、あるいは路人に子を売るという言い伝えが、やはり子安地蔵の信仰に関連することを示している。地蔵は常に子供の友達であった。」

③東福院（新宿区若葉町二丁目 真義真言宗）豆腐地蔵尊（同寺印刷案内書）(57)

図⑪（東福院 豆腐地蔵尊）

当山は人皇106代正親町天皇の天正三年（1575）麹町九丁目横丁に創立。江戸時代に入り、寛永十一年（1634）江戸城の外濠構築のためこの地に移ることになった。開山は法印祐賢、開基は大澤孫右衛門尉。本尊は弁財天木像（弘法大師作）、涅槃画像、その他の寺宝があったが戦災で焼失してしまった。この弁財天は寺伝によると『丹波笹山の城主、青山下野守の先祖が、出世を望んでこの弁財天を信仰し、寺域を拡張し、お堂を寄進した末、望みを達した』とされている。このことから爾来出世弁天として名が高かったが、近火あるとき寺門に火を近づけず、異人が空中に現れて火を消し、又風向きを変えるなどしばしば霊異を起こしたことから火防弁天とも言われた。

又、境内には豆腐地蔵尊が祀られている。高さ1メートルあまりで、左手首から先が欠落している。この地蔵尊は寺の開基、大澤孫右衛門尉の曽孫、孫七郎が死んだ子の供養のため慶安二年（1649）に造られた。

由来は、安永年間（1771-81）この坂下に豆腐屋があったが、この者は極道者で手の着けようのない悪徳者で、近隣の憎まれ者であったとのことである。いつの頃かこの店に地蔵尊が坊さんに化けて毎晩のように豆腐を買いに来るようになった。しかし、豆腐屋に払う銭は木の葉に変わるらしく、豆腐屋は大層怒って狐狸の仕業と思い、ある晩この坊さんが来るのを待ち構えていた。坊さんが豆腐を受け取って、金を払った手を差し出したところ、すかさず包丁で手首から切り落としてしまった。豆腐屋が滴る血の後を追っていくと、地蔵堂で跡が消えていた。豆腐屋はここで初めて地蔵尊の誡めなりと覚り、以後改心して地蔵堂を造り信仰に励んだという。それ以来「豆腐地蔵」と呼ばれるようになった。

切り落された手首をさすると、ハレモノが治るといわれて信仰を集め、信者からは豆腐が供えられた。地蔵尊は昔からのもので、切り落とされた手首も保存されていたが、戦災で行方不明になってしまった。（図⑪）

なお、当山は御府内八十八ヶ所の二十一番札所となっている。

現住 第二十三世 敬弘誌

長龍寺・喜運寺・東福院と、旧府内には豆腐地蔵尊が三体あり、賑やかなことである。これは江戸の十八世紀後期における地蔵信仰の隆盛を示していよう。しかも、それぞれの縁起物語は趣旨、展開に差異はない。かくて、化け地蔵の一型として豆腐地蔵譚が存立し、広がっている。それぞれにはまた独自なモティーフがあり、たとえば東福院の伝えでは、木の葉による贋金モティーフが見出せる。木の葉は豆腐小僧が捧げもつ豆腐の紅葉（紋）に通じるが、まずは民間伝承の昔話や伝説の「子育て幽霊」や「狐の変化話」等でよく語られる。なお現段階では、寺院間のネットワークや相互交渉は見出されないようである。

まとめ

黄表紙を賑わし、双六やカルタにも登場する豆腐小僧は、江戸時代は十八世紀半ばごろか、東都で化け物話を弄ぶ者が造作したとしてよいだろう。あたかも以前から伝わるがごとくに。「見越し入道の孫」（『化物着到牒』）などと箔が付いて、評判になると、その出自を「狸、河童（獺）」の変化とし（『化競丑満鐘』）、一つ目小僧に結びつけるのは道理の成り行きであった。同じように、ある人士が新たに化け物を思案するとき、あれこれの化け物話を参考にしたであろう。

豆腐小僧の紅葉豆腐を捧げる体は、まさに工夫の極みである。これはプレモダンの、また民俗社会での俗信（民間信仰）に副った表象といえよう。豆腐を三日月に供えて厄を払い、また用いて穢れを祓い、罪を消す。陸奥や府内の人びとは、地蔵菩薩に捧持してその利益を仰いできた。

また豆腐小僧には、とくに子どもの参詣習俗が映じているであろう。少年による儀礼の実修プロセスが、小さ子神の生成や顕現の物語をかたどっていく。この国には「祇園会の稚児」「虫送り」「十日ん夜」「強飯式」「子ども歌舞伎」など、子どもが取り仕きる祭礼が多い。伝承物語には小さ子の活躍譚が目だつ。古代神話では少彦名神が国土創成に活躍し、昔話では一寸法師、たにし息子など、異常誕生の小童が事業の成功によって幸福な結婚を獲得し、お伽草子（室町物語）『小男の草子』のように、主人公が神となる物語も編まれてきた(58)。ちなみに『狂歌百物語』（注20）の「一寸法師」は小僧袴を着け、大きな頭で更け顔である。

豆腐小僧は、地蔵菩薩の信仰伝承と多くの点で通じ合う。仏像は一般に頭部が大きいが、人体に近い容姿の地蔵は、まさに頭でっかちである。また、衆生済度のために六道を経廻り、人道（人間界）に現れるときは、美麗端正な小児、小法師、小僧に化身すると語られてきた。豆腐小僧がかぶる筍笠は幅広で雨天に用いられるが、野外の辻に立ち、さらに巡行するとされる地蔵の必須アイテムであった。もってして、両者は似た者同士なのであった。

最も注目すべきは、豆腐小僧は化け物として造型された。地蔵は様ざまに応化して姿を変えて現われるので、化け物のようだと観想され、「化地蔵」と呼ばれた。その物語は、ともに構造を同じくしている。地蔵は日暮れや夜に人身で出現し、怪しまれて斬られてしまう。それ

が後刻に地蔵尊だと気づかれ、この世での出現と霊験が謳われ、いよいよ信仰を集めた。江戸の都市や村落の民はそのことをよく知っていた。豆腐小僧は豆腐をせしめるも、巷では長い頭巾の侍に睨みつけられて、雪女や大蛇とともに逃げまどって豆腐を落としてしまう。「怖ろしや怖ろしや、さても頭の長いお爺だ」（寛政四年〈1792〉刊『怪物徒然草』）（59）とこぼすのは、化け地蔵の失敗を想起させている。

化け地蔵には豆腐の民俗が結びついて寺院縁起となった。豆腐小僧は豆腐を捧げるのが使命である。豆腐を介して、片や地蔵の変化話、片や小僧の化け物話が成り立っている。そして両者は黄昏時に現れる。「豆腐小僧」を案出した人士は、地蔵の子ども姿の応化説や、化け地蔵譚の一型の豆腐地蔵譚を聞きおよんで、小児の化け物を作り上げたのであろう。大顔の異形は、そう考えてこそ納得される。

江戸の豆腐地蔵譚の成立はおおよそ十八世紀の後期以降であり、それは黄表紙が盛んに出版された時期と重なっている。彼から此へ、此から彼への影響が十分に想定される。豆腐地蔵説話と「豆腐小僧」は別個に存していたが、時代のお化け好きが結合させたともいえよう。豆腐小僧は創作であるが、じつにあれこれの伝承が交錯して誕生した。

注

1 『江戸化物草紙』（1999年、小学館）、『大江戸化物細見』（2000年、小学館）、『江戸滑稽化物尽くし』（2003年、講談社）、『江戸の化物―草双紙の人気者たち―』（2014年、岩波書店）、「商品としての豆腐小僧」（「江戸の化物草紙をひもとく―草双紙の世界―」、別冊太陽170 日本のこころ 小松和彦監修『妖怪絵巻 日本の異界をのぞく』（2010年、平凡社）、『江戸化物の研究―草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開―』（2017年、岩波書店）。

対談「江戸のキャラクター」（『京極夏彦対談集 妖怪大談義』2005年、角川書店）。

なお、本稿で取り上げた黄表紙類の本文、図版は右書から引用、転載した。

2 注1『江戸化物草紙』所収。引用に際し、漢字を宛て、読み仮名・読点・濁音を付す。以下同じ。現代語訳はカバット氏のそれに従い、徳田が補った。国立国会図書館デジタル・ライブラリー。

3 昨年11月に、歌舞伎舞踊の「越後獅子」を鑑賞した（赤坂ACTシアター）。演者の中村勘太郎（10歳）は顔を白塗りして、目、口に朱を指し、両眉は墨でゆったりと八の字に描いていた。

4 紅葉豆腐について、「豆腐の製箱」図（榊原芳野編録、明治5年〈1872〉、『豆腐集説』）、「紅葉豆腐の図」（神田玄泉『食物知新』享保11年〈1726〉刊）。「紅葉豆腐の図」には「トウフ ヲカベ」とあり、豆腐には紅葉の模様がある（注1江戸の化物草紙をひもとく―草双紙の世界―）。

cf. 林春隆『新撰豆腐百珍』は山崎美成（安政3年〈1796-1856〉）『麓の花』を引いている。

「堺鑑巻の下、名物土産の部に曰く、何国にも豆腐はあれども、別して当津のを勝れたりと古へより云伝へり。紅葉といふ名を加へたることは、堺の桜鯛にも不劣味なればとて、かく云ふとぞ。花に対する紅葉の縁なるべし。又或る人云、此豆腐の人の能くかふやうにも祝て付けるたる名共云へり。買様と紅葉と音便成る故歟、今豆腐の上に紅葉を印す。詞に就て形を顕す成べし。買用も通ひてよし。この説は『国歌万葉記』巻の五、和泉名所にも見へたり。今戸にても豆腐に紅葉をつくることはこれが拠なるべし。江戸にて紅葉を印するもいと古くよりなすわざなり。そは『俳諧当世男』（延宝4年印本）巻の上、紅葉といへる題にて 朝風や紅葉をさそふ豆腐箱 重秀 と見へたるにて、延宝の頃已に江戸にあるを見るべし。按に『きのふはけふの物語』巻の上に曰、ある人寺へ参る。長老御覧じて、さてさてきどくの御参りとてしやうじ給ひて、先々御茶しん上申せ、もみじにたて、まいらせよとおほせらるゝ。此人聞て、ふしんして色々あんじても、がてんゆかず。いやいや、とふは一度のはぢとおもひ、長老様に

とひ申せば、こうようたてよと申す事じやとおほおせける。この一くだりは豆腐のことにはあづからねども、紅葉を濃能（こうよう）といへる音便もてかよはせたる事のあれば、堺鑑の説も音便の説に従ふべし。」（読点を補う。）（『豆腐百珍』天明2〈1782〉、『麓の花』（文政2〈1819〉、『堺鑑』天和3年〈1863〉刊）。

cf. ちりめん本昔噺シリーズN.12『*The Cub's Triumph*（野干の手柄）』明治19年（1886）刊。ジェイムズ夫人訳述、小林永濯（えいたく）画。昔話「（狐狸の）化け比べ」の絵本化であり、狐の子が紅葉紋の豆腐を買い求めている場面の挿絵がある

5　川部裕幸「疱瘡絵の文献的研究」（『日本研究』21、2012年）。竹原直道「瘡神のパロディとしての豆腐小僧」（国際日本学研究会『Cultures/critiques』3、2011年）。笹方政紀「疫病と化物」（東アジア怪異学会編『怪異学講義－王権・信仰・いとなみ－』2021年、勉誠出版）。氏には「疱瘡絵としての豆腐小僧」（『怪魅型』1、私家版）がある由、未見。

6　注1『江戸滑稽化物尽くし』、p.17、61、100。なお、『怪物昼寝猟（かいぶつひるねのいびき）』（市場通笑作・鳥居清長画、安永9年〈1780〉刊）には、茶碗を捧げ持つ「茶運び小僧」が出る。大顔の子どもで、足先は化け物の指であり、『夭怪着到牒（ばけものちゃくとうちょう）』の小僧姿を模したか。同書p.115。なお、注（1）「商品としての豆腐小僧」の図版も参照のこと（p.157）。

7　江戸東京博物館にて開催された「豆腐小僧あらわる！」展（2011年5月1日～22日）は、黄表紙、合巻の豆腐小僧の図を展示していたが、天明二年（1782）刊の『豆腐百珍』によって豆腐ブームが生じ、「豆腐小僧」が創られたとの視点に立つものであった。

8　鈴木棠三編『日本俗信辞典』（1978年、角川書店）の「大豆」項。

9　長谷川強（つよし）校注、1991年、岩波文庫。

10　野本寛一編『食の民俗事典』（2011年、柊風舎）の「豆腐」項に拠った。なお、吉野裕子「陰陽五行と日本の民俗」（2021年、人文書院）、小川直之『麦・雑穀と芋』（日本の食文化3、2019年、吉川弘文館）、林春隆『新撰 豆腐百珍』（1935年、岡倉書房。1982年、中公文庫）も参考となる。

豆腐小僧、あらわる―化け地蔵・豆腐地蔵の応化―

11　米谷陽一「【野村語録】から見た野村学」（大島廣志編『野村純一　怪異伝承を読み解く』2016年、アーツアンドクラフツ）。

12　https://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/museum/future/article.php?p=634.
さらに、鳥取市の河原町渡一木では、12月8日に「うそつき豆腐」が催される。

13　朝日新聞デジタル2016年12月9日「豆腐を食べて、うそ帳消し 河原で風習実演」http://www.asahi.com/articles.ASJD843TSJD8PUUB005.html

14　『日本歴史地名大系6　山形県の地名』、『同7　福島県の地名』（1991年、平凡社）。

15　藤田稔『常陸の伝説』（1976年、第一法規）。伊藤慎吾氏、御教示。

16　注1「豆腐小僧盛衰記―黄表紙が流行らせた化物―」（『江戸の化物―草双紙の人気者たち―』p.141。

17　続帝国文庫『江戸作者浄瑠璃集』所収。「中の巻 箱根の先化住居（さきばけずまひ）の段」（挿絵アリ）。

18　水木しげる『「図説」日本妖怪大全』（1994年、講談社α文庫）。

19　京極夏彦『文庫版 妖怪の理 妖怪の檻』（2011年、KADOKAWA）。また『文庫版 豆腐小僧双六道中ふりだし』（2010年、角川文庫）。『豆腐小僧その他』（2011年、角川文庫）等。

20　京極夏彦・文、多田克己編『妖怪画本 狂歌百物語』（2008年、国書刊行会）。

21　香川雅信（『江戸の妖怪革命』2014年、KADOKAWA）。
ちなみに、『怪物昼寝猟（ばけものひるねのいびき）』（安永9年〈1780〉刊、鳥居清長画）に「茶運び小僧」が出る。カバット氏は『桃食三人子宝噺（ももくいさんにんこだからばなし）』（寛政7年〈1795〉刊、市場通笑作・笠松斎長喜画）に「豆腐小僧の親戚ともいうべき小僧系の化物がたくさんいる。ここでは「茶運び小僧」が登場している。酒田金時に頭を押さえられた小僧は、豆腐小僧にならって、大事な茶をこぼしている。当時、鹿の子餅という店で、茶を運ぶからくり人形が話題となった。この人形が茶運びの化物のモデルにもなっている。草双紙の商業性を語っている」とされる。

さらに『百鬼夜行之図』（西尾市岩瀬文庫コレクション。江戸時代末期）は、一つ目の、唐笠をかぶる「雨降り小僧」が歩きながら、盆に載せた豆腐を長い舌で舐めており、河鍋暁斎画『百鬼夜行』（イスラエル、ゴールドマンコレクション）では丸笠を付けた一つ目の小僧が、地面に座り、そこに置いた盆上の豆腐を長い舌で舐めている（注1「江戸の化物草紙をひもとく―草双紙の世界―」）。また、『百種怪談妖物雙六』（徳田コレクション、他蔵、一壽斎（歌川）芳員、19世紀後期）に「醜魂ヶ原の獨目」とみえる。

なお関連する論孝に飯島吉晴「豆腐小僧の周辺 小さ子神の系譜」（『怪』vol.0032、2011年、角川書店）がある。

22 注1『大江戸化物細見』口絵。

23 村上健二編著・水木しげる画『改訂・携帯版 日本妖怪大事典』（2015年、KADOKAWA）。

24 注20書。

25 詞書の釈文を引く（括弧内は未考）。

道州の民のごとし。その丈三尺ばかりなり。面二尺、丈一尺なるべし。下の短さは思ひやられで怪しからず。灯台の許に居寄りて、火を消さんとす。頼光に睨まれて、尼君にこにこと咲へり。眉太々と作りて、紅赤く、向歯二つに鉄漿付けて、直しく紫の帽子にて、紅の袴長やかに着たり。身にはつやつや懸かる物なし。手細くして糸筋のごとし。色白くして雪のごとし。（にけむに満ち満てり。）雲霞の消ゆるごとくして失せけり。

また、京都芸術大学本『百鬼夜行絵巻』は牛車に乗る大顔女を描きだす。ちなみに鳥山石燕著『今昔画図続百鬼』（安永九年〈1780〉序）の「大首」は次のように記す。

大凡、物の大なるもの皆おそるべし。いはんや雨夜の星明りに鉄漿くろぐろとつけたる女の首おそろし。なんともおろか也。

なお、妖怪とお歯黒の組み合わせは、怪異の強調に常套的な趣向である。徳田「『百鬼夜行絵巻』の『山伏と一軒家』」（妖怪文化叢書、小松和彦編『進化する妖怪文化研究』2017年、せりか書房）。

26 荒俣 宏『福助さん』（1993年、筑摩書房）。

27 『千四百年御聖忌記念特別展 聖徳太子 日出づる処の天子』（2021年9月～大阪市立美美術館、11月～サントリー美術館）

28 「江戸化物の記号学」（注1『江戸化物草紙』所収）。

29 この説話はいわゆる「牛に引かれて善光寺参り」譚と対応、共通している。動物が貪欲、無信心の老婆を寺院に誘導し、仏教信者にする。また、霊地・霊場の発見譚と類例をなしている。徳田「「牛に引かれて善光寺参り」譚の形成」（イメージ・リーディング叢書『絵語りと物語り』1990年、平凡社）。

30 柳田國男「地蔵殿の苗字」（『郷土研究』1913年6月、ちくま文庫）、「水引き地蔵」（11月、同）、「廻り地蔵」（1914年5月、同）、「子安地蔵」（8月、同）、「黒地蔵白地蔵」（1915年1月、同）。

なお、各地の古文献、民間伝承の地蔵説話は、奥村寛純編『新編日本地蔵辞典』（本山桂川原著、1989年、村田書店）が博捜し、地蔵の霊名（通称）は石川純一郎『地蔵の世界』（1995年、時事通信社）が詳しく掲出し、分類する。

31 「蘇生寺笠地蔵」ともいう。徳田「笠寺観音縁起の展開」（『國學院雑誌』114巻11号〈通巻1279号〉、特集 資料が語る物語、記録からよむ物語、2013年）にて、女性が仏に笠を被せ、幸せを得るとの縁起 説話類を掲げた。

32 元禄10年（1697）刊『延命地蔵経直談抄』6・37「摂津大坂大願寺笑地蔵ノ濫觴」（大島建彦序・渡浩一編、1985年、勉誠社）。

なお、以下は國學院大学大学院生鈴木麻位子さんの御報告による。中山太郎「笑ひ地蔵」（『土の鈴』大正11年〈1922〉4月1日号）に、「先年、折口信夫氏から因幡鳥取邊では、地蔵の周りを三度廻ると、地蔵が笑ひ出すと云ふ話を聴いたことがある。（略）間もなく故奥村繁次郎氏から、東京上野公園の東照宮前の石鳥居の傍に在る石の大燈籠の周りを、三度息を吐かずに廻ると幽霊が出るとい

ふので、今に「化け燈籠」と稱してゐるとの話を聽かされた事がある」。古河市茶屋新田の「化け地蔵」がある（後掲）。

33　森泰樹『杉並の傳説と方言』（杉並郷土史叢書4）、『杉並風土記』上中下（同3、5、6）。同氏の業績は、大嶋小芳「杉並の偉人No.2 郷土史家 森泰樹（1919-2007）」（『炉辺閑話 杉並郷土博物館だより』65、令和3年10月）が要を得てまとめている。

34　大島建彦「地蔵の説話と民俗」（『道祖神と地蔵』1992年、三弥井書店）。渡浩一「子どもと地蔵（一）―遊びと［お地蔵さん］―」、「（同二）―賽の河原の河原の［お地蔵さん］―」（民衆宗教を探る『お地蔵さんの世界―救いの説話・歴史・民俗―』（2011年、慶友社）。

35　『郷土研究』1915年6月。柳田國男全集7、ちくま文庫）。

36　『日本神話伝説集』昭和4年〈1929〉、『日本の伝説』昭和7年、文庫版全集25、1990年、ちくま文庫）。

37　永正九年（1512）成立『法華経鷲林拾葉鈔』巻二二薬王品、天正十三年（1585）写『法華経直談抄』巻九末所収〈笑地蔵〉。「朽ち残る真砂の下の橋柱又様変えて人渡すなり」。元禄十年（1697）刊『延命地蔵菩薩直談抄』6・37「摂津大坂大願寺笑地蔵ノ濫觴」（1985年、勉誠社）。「ナガラ江ヤモニウヅモレシ橋柱マタ道カヘテ人渡スナリ」。なお、水木しげる『図説 日本妖怪大全』（1994年、講談社＋α文庫）「笑地蔵」では、岐阜県墨股あたりの笑地蔵について、西行伝説とからむものを紹介し、また神奈川県大磯の化け地蔵を引く。

38　叢書江戸文庫44、高田衛・原道生責任編集『仏教説話集成』2（校訂 西田耕三、1998年、国書刊行会）。ちなみに妖怪・化け物も笥笠を付けている。「獺」（鳥山石燕『画図百鬼夜行』安永4年〈1775〉刊）、「雨降り小僧」（同『今昔画図続百鬼』安永7年〈1778〉刊）を参照のこと。

39　青木祐子氏御教示。吉岡村誌編纂室編『吉岡村誌』1980年、群馬県吉岡村教育委員会）。引用に当たり読点を加えた。

40　注39書。

41　原拠『江戸の口碑と伝説』1931年。（「鶏鳴旧跡志」牛込、池田慶次郎氏所蔵）。宝暦年間（1751-63）の記事多し。明和1764-71以降成立。成城大学民俗学研究所本ニハ見エズ）。

42　『新宿と伝説』（原拠、四壁庵茂鳶『わすれのこり』）。

43　『新宿区の文化財（6）伝説・伝承』（1982年）、注42『新宿と伝説』。

44　古河市史編纂委員会〈民俗部会〉編『古河の昔話と伝説』1978年）。鈴木麻位子氏御教示。

45　狂歌研究会編『化物で楽しむ江戸狂歌－『狂歌百鬼夜狂』をよむ－』（2014年、笠間書院）。

46　石川一郎編『江戸文学俗信辞典』（平成元年〈1989〉、東京堂出版）

47　注20書。

48　『江戸作者浄瑠璃集』（続帝国文庫）。

49　注17書。

50　『続日本歌謡集成3 近世編 上』（東京堂）。文政年間末年〈1829〉）の成立。「『鄙廼一曲』記載本は化け地蔵の所作の滑稽さ、徳田本のそれは地蔵の霊験を語る」（伊藤慎吾「『酒餅論』の早物語化」、『擬人化と異類合戦の文芸史』2017年、三弥井書店）。

51　注1「豆腐小僧盛衰記」『江戸の化物―草双紙の人気者たち―』）。

52　『長龍寺史』（1993年、宗教法人長龍寺）。なお、「豆腐地蔵」（杉並郷土史叢書 森泰樹『杉並の伝説と方言』1980年12月、杉並郷土史会）。

53　江戸叢書五。引用に際し、句点・濁点・送り仮名を補い、正漢字は当用漢字に改めた。

54　『新撰東京名所図会』小石川区之部、『風俗画報』臨時増刊44編、明治39年〈1906〉刊）。漢字は当用漢字に改める。なお、『小石川志料』は松崎純庸著、文政3年〈1820〉成立。

55　県別ふるさとの民話16『東京都の民話』1980年、偕成社、伝説・文京区〉

56　『郷土研究』1913年6月、柳田國男全集7、ちくま文庫）。引用に当たり、新たに改行し、段落を施した。

57　喜運寺事務所配布。

58　柳田國男「松王健児の物語」「雷神の信仰の変遷―母の神と子の神―」（『妹の力』1940年、創元社。文庫本全集11、1990年、ちくま文庫）。近藤喜博「説話における神話的理解」（日本の説話1『原点と周辺』19878年、東京美術）。徳田和夫「床下神の物語」（イメージ・リーディング叢書『絵語りと物語り』1990年、平凡社）、「小童神の恋物語」（『小男の草子』を読む」（岩波セミナーブックス、1993年、岩波書店。改訂版、セミナーブックス・セレクション『古典講読 お伽草子』2014年、同）。徳田校注「小男の草子」（新日本古典文学大系、市古貞次・秋谷・沢井・多嶋・徳田共編『室町物語集 上』1989年、岩波書店）。

59　注1「商品としての豆腐小僧」（『妖怪絵巻 日本の異界をのぞく』）p.158。

付載 地蔵菩薩に関する参考文献（抄）

・長尾 豊「化地蔵と人違い」（『郷土研究』6巻2号、1932年）
・三吉朋十『武蔵野の地蔵尊』（1972年、有峰書店）
・速水 侑『地蔵信仰』（塙新書49、1975年、塙書房）
・桜井徳太郎編『地蔵信仰』（民衆宗教叢書10、1983年、有山閣）
・本山桂川原著・奥村寛純補訂『新編日本地蔵辞典』（1989年、村田書店）
・山村彌五郎『杉並区の地蔵菩薩』（1992年、杉並区下井草3‐33‐6。杉並区立図書館S11.38ヤ）
・大島建彦『道祖神と地蔵』（三弥井民俗叢書8、1992年、三弥井書店）
・石川純一郎『地蔵の世界』（1995年、時事通信社）
・渡 浩一『お地蔵さんの世界―救いの説話・歴史・民俗―』（2011年、慶友社）
　同編『延命地蔵菩薩直談抄』（1985年、勉誠社）
・大島建彦監修、渡・高達・他編『十四巻本 地蔵菩薩霊験記』上下（2003年、三弥井書店）
・齋藤真麻理「笠地蔵譚」（『国文学研究資料館紀要』26、2000年）
・岩崎雅彦「地蔵菩薩と子ども―『宇治拾遺物語』第十六話と狂言『金津地蔵―』（『日本文学』51－7、2002年）、「研究十二月往来〈285〉地蔵の来訪」（『鍄仙』592、2010年、鍄仙会）
・霧林宏道「輪講『直談因縁集』」（6－24「地蔵、貧女ノ田植ヲ助成スル事」、2013年11月、伝承文学研究会〈東京例会〉）
cf. 地蔵菩薩の化身説、子どもとの関連をめぐる近年の論考に、清水邦彦「日本における地蔵信仰の展開―祖師から民衆まで―」（博士学位申請論文、神奈川大学、https://kanagawa-u.repo.nii.ac.jp/action=）がある。

付記

本稿は、二〇二一年8月21日に杉並区立郷土博物館の企画展示「百鬼ぞくぞく妖怪ワンダーランド」展にて「豆腐地蔵と豆腐小僧」と題して、また資料を補って同年10月16日に伝承文学研究会（東京例会）にて「豆腐小僧あらわる―地蔵菩薩の応化―」と題しての講演をもとにしている。

（本学名誉教授）